

事業名称	多世代交流による地域文化再発見プロジェクト		
実行委員会	地域文化再発見プロジェクト実行委員会		
中核館	国立民族学博物館		
	住所	〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1	
	TEL	06-6876-2151	FAX 06-6875-0401
	ホームページ	<a href="http://www.minpaku.ac.jp/">http://www.minpaku.ac.jp/</a>	
構成団体	東北歴史博物館、仙台箆筒製造販売組合、金沢美術工芸大学、静岡文化芸術大学		
事業開始時点の課題分析	<p>博物館は、生涯学習施設として多世代の人に様々な「発見」を促す場である。そして、その発見を通して、自分の暮らしに還元できることも意図している。とくに人文系の博物館では、博物館での発見を等して、自分たちの暮らししている地域の文化を自ら発見できるようになることが望まれる。しかし、日常の何気ない暮らしの文化に気づくことは非常に難しい。博物館の持つ機能を高めるために、展示を通して、地域文化を見いだすきっかけとする仕掛け作りを行う必要がある。</p> <p>この課題に応えるため、平成 28 年度に「地域の核となる美術館・歴史博物館活動支援事業」に採択された「参加型展示構築モデル化事業」を東北歴史博物館が中心となって実施した。そこでは宮城県の職人と大学生、高校生の参加により展示構築を通して、足下の地域文化を再発見、再認識することに成功したが、その面的な展開という点では、不十分であった。この活動をより広域、かつ標準的なものにしていく必要がある。</p>		
事業目的	<p>現在の博物館活動においてニーズの高い市民参画型の活動において、展示等における明示的な発見を促す仕掛けについては検討されるが、それを持ち帰り、自主的な活動や発見に結びつく活動への展開は学校教育を除き少ない。本事業では、展示とワークショップを通して、次世代の地域文化を担う学生や社会人に自分たちの地域の文化を再発見するきっかけを作るとともに、博物館が、そうした地域文化を担い、継承していく場として活動するためのモデルを構築する。</p> <p>このために、本事業では、展覧会とワークショップを開催し、他地域、多世代、そして学芸員も含めた多様な立場の人たちの交流を通して、自分の地域の文化の継承意欲を醸成しようとするものである。</p>		
事業概要	<p>現在の博物館活動においてニーズの高い市民参画型の活動において、展示等における明示的な発見を促す仕掛けについては検討されるが、それを持ち帰り、自主的な活動や発見に結びつく活動への展開は学校教育を除き少ない。本事業では、展示とワークショップを通して、人的なネットワークを構築し、次世代の地域文化を担う学生や社会人に、自分たちの住む地域の文化を再発見するきっかけを作るとともに、博物館が、そうした地域文化を担い、継承していく場として活動するためのモデルを構築する。</p> <p>このために、本事業では、展覧会とワークショップを開催し、他地域、多世代、そして学芸員も含めた多様な立場の人たちの交流をはかる。そして、一連の活動を通して、自分の地域の文化の継承意欲を醸成しようとするものである。</p>		

<p>実施項目 ・ 実施体系</p>	<p>(1) 地域文化の発信の核となる美術館・歴史博物館  <input type="checkbox"/>ア 美術館・歴史博物館の情報発信、相互連携  <input type="checkbox"/>イ ユニークベニューの促進  <input type="checkbox"/>ウ 地域のグローバル化拠点としての美術館・歴史博物館  <input checked="" type="checkbox"/>エ 地域に存する文化財を活用した地域共働の創造活動や地域の魅力の発掘・発信  (2) あらゆる者が参加できるプログラム及び学校教育や地域の文化施設等との連携によるアウトリーチ活動  <input type="checkbox"/>ア 小・中・高等学校と連携した地域文化の担い手の育成  <input checked="" type="checkbox"/>イ 大学等と連携した国内外で活躍する文化人材育成プログラムの開発  <input checked="" type="checkbox"/>ウ 社会人ほか多様な対象者のための学習講座の実施  <input type="checkbox"/>エ 障がい者の芸術活動支援・鑑賞活動支援等の事業  (3) 新たな機能を創造する美術館・歴史博物館  <input checked="" type="checkbox"/>ア 観光・まちづくり・国際交流・福祉・教育・産業等他分野との連携・融合による活動  <input type="checkbox"/>イ 文化財の新たな保存管理・活用の手法の開発</p>
<p>実施後の 成果・効果等</p>	<p>(1) 交流ワークショップは、大阪、浜松、金沢の3回開催した。各回の宮城の職人3人と、開催地の職人3人が参加し、鼎談形式で行った。参加した職人たちのヒアリングからは、ワークショップの場だけではなく、事前の打ち合わせなどを通して、産地の異なる職人の置かれた状況や技術の違いを知るとともに、それぞれの活動に対する発見があった。同時に、大阪では文化財保存科学を学ぶ学生、静岡ではデザインおよび文化施策を学ぶ学生、金沢では美術工芸を学ぶ学生にも出席を促した。また宮城のデザイン系の学生も参加し、学生同士の交流を促すとともに、職人の話を聞くことで、自分たちの学習への刺激となった。また、アンケートやヒアリングからは自分たちの将来イメージ形成に役立つとともに、専門外の学生の捉え方の違いを知ること、職人技術の理解を向上させる効果があった。</p> <p>(2) 来館者ワークショップは、大阪6回、浜松2回、金沢4回の計12回開催した。大阪では文化財保存科学を学ぶ学生、静岡ではデザインおよび文化施策を学ぶ学生、金沢では美術工芸を学ぶ学生が来館者への説明と体験補助を担った。事前勉強会でワークショップの意図や、その背景にある技術を学んだ上で、自分たちの関心に引きつけて来場者と接した。この活動を通して、来館者にも職人の技術をより身近なものとして伝えることができたとともに、学生たちにとっても大学では学ぶ機会の少ない、子どもを中心とした一般の人たちに物事を伝える経験となった。</p> <p>二つのワークショップを通して、職人たちのみならず、学生たちに通常の学習では得られない経験を通して、自分たちが専門として学ぶ技術の新たな側面を知る効果を得られた。</p>